【福島大学むらの大学アーカイブ 3】【川内 Chapter 3】

災害時の教育　震災とこれからの子どもたち

元川内村教育長　石井芳信さん

インタビュー日時：2023 年 10 月 25 日
インタビュー場所：川内村立川内小中学園
聞き手：石倉未晴、太田葵、千葉羽奏、八島春日、千葉偉才也

プロフィール

昭和 19 年 11 月 20 日 福島県双葉群川内村生まれ（インタビュー時 78 歳）。双葉高校卒業後、18 歳から川内村役場職員として定年まで活動。その後 2004 年から 8 年間教育長を勤め、計 50 年間行政職に携わった。

１．震災前の川内村

－生まれた時が終戦の１年前ほどだと思われますが、その時の様子を教えてください。
石井：終戦のときはまだ半年ぐらいだから、生まれてすぐ空襲にあったんだよ。ここ（川内小中学園）からすぐ近くなんだが、そこが空襲にあって六つ上の姉さまがおんぶして逃げたみたいな。

－双葉高校に通われていたということで、そのときは下宿で行かれたんですか。
石井：富岡町に村立の寮があったんですよ。高校に通う子どもはみんなそこに住んで、電車で、あの頃は汽車なんですが各学校に通ったんですよ。

－石井さんが現役で働かれていた時期の川内村の暮らしっていうのはどういう暮らしだったんでしょう？
石井：風光明媚な農村でやっぱり農業が主ですからね。でもうちは家内も村職員で保母をやってたもんですから農業のほうは全部貸して。いや本当に穏やかな農村だったよ。

－その時期の川内村が抱えていた課題はなんでしたか。
石井：やはり後継者不足でしょうね。ほとんどの後継者が都会のほうに就職しちゃうということでそれが一番の悩みだったでしょう。子どもの数もどんどん減ってきていました。もともとは小学校が三つあったんですが統合したっていうことで。

２．震災からの日々

－東日本大震災追悼式でご遺族代表としてスピーチをされた記事を拝見しました。
石井：震災当時はおふくろがいたんですが、ちょっと体が不自由になったもんですから、大熊町の双葉病院のほうにいたんですよ。病院も震災で避難したわけだ。そのとき、うちのおふくろも県立、あそこは何だっけ？平工業かな？そちらのほうに避難したんですが、避難途中に亡くなったんです。

－避難途中にですか。
石井：そうそう。だから、おふくろの死亡診断書は 3 月 14 日何時何分ってなるんですが、時間が分かんなくて 14 日ころなんですよ。

－ちょうど川内からビッグパレットに避難した時期ですよね。お母さまの亡くなられたという一報はどのタイミングで？
石井：うちらも避難する時期で全然分かんなかったんですよ。仙台に弟がいるんですが、インターネットで調べたら小名浜のほうに避難してるみたいだよということが分かって。そこに弟と対面で行ったら亡くなってたんですよ。

ーその対面に行かれたのは 3 月中ですか。
石井：そうですね。

ー郡山に避難したあとに小名浜に向かって分かったと？
石井：ええ、そうそう。

ーお母さまのご遺影と四国を旅されたとお聞きしたんですが、何かきっかけはありましたか。
石井：おふくろ亡くなったとき、本当なら死に水を取るとか何かやってあげるんでしょうが、ああいう死に方したからね。おふくろの供養を兼ねて。2 週間だっけかな。あの頃は足腰も丈夫だったから。いがったよ。

ー2011 年 3 月 11 日、石井さんはその日はどこにおられましたか。
石井：ちょうど中学校の卒業式だったんですよ。午前中卒業式をやって、午後から定例議会だったんですよ。ほれでちょうど定例議会が閉会して階段を下ってくるとき地震がありました。議場が役場の 2 階なんですが這って下ってきました。まさかこんなには津波まで来るとは思わなかったしね。揺れはひどかったです。

ーそのあとは、何かなんだか分かんないですよね。
石井：川内は地盤が花こう岩っていうか、それほどの被害はなかったんですよ。ちょっとの屋根の端が壊れたとか何ぐらいでね。だから、そんなに被害はなかったんですが、富岡町のほうから川内に避難するっていう、まだ原発どうのこうのって分かんなかったですから、その頃は。それから、避難するっていうことで、富岡、あっちの町民たちが川内に避難したんですよ。だから、学校も開放したし、役場の体育館とか、みんな開放して、富岡町民を受け入れたっていうことでね。

ー川内村の人たちが、まさか自分たちも避難するとは思ってなかったですよね。
石井：そうだね。

ー子どもたちのことについての議論はありましたか。また避難生活はどうでしたか。
石井：子どもまではなかったんですよ。やっぱり大人たちが主だったんです。うちの教育委員会はコミュニティセンターのほうにあったんですが、そこも当然（富岡からの避難者を）入れたし。あと、重症患者もいたもんですから二人ぐらいかな、教育長室に二人……受け入れて、対応したり。あと食べ物関係はコミュニティーセンターのほうに調理室があるもんですから村の婦人会の方々が米だ何だ持ち寄っておにぎり作ったりなんかして町民の方に与えたっていうて。まさか 3 日か 4 日、1 週間ぐらいで収まるんだろうと思ってたからね、その頃は。で、今度は原発でしょ？原発 1 号機と 2 号機で、川内も避難するということになったもんですから、富岡の町民と一緒に郡山のビッグパレットのほうに避難したということなんですよ。

－震災が起こってから数日経過してからの生活を教えてください。
石井：1ヵ月ぐらいはビッグパレットのほうにお世話になって、で、今度、アパートっていうか、それを見つけて、家内と一緒に過ごした。
最初は、家内はビッグパレットでなくて、いろいろうちの息子、仙台にいるもんだから、仙台に行ったり、いろいろな、点々してたんですよ。で、1ヵ月ぐらいは別な場所でお互いに生活をして、1ヵ月ぐらい過ぎてからアパートを借りたもんですから、そこに家内も……合流をしたということです。
ほんだら家内には、うちは、俺はおまえんこと、今んとこは面倒見れねえんだから、勝手にいいっていうことで。別々の生活をしていました。

－教育長という立場でビッグパレットで過ごされてるときは教育長としての仕事で 24 時間拘束されてんですか。
石井：そうですね、ええ。寝ていたところはただ、こういうところ（教室の一部、床を指して）でみんなと雑魚寝だよ。みんな適当に寝てたね。

３．避難先での教育活動

－避難生活の際の子どもたちについてどうお考えでしたか。
石井：やっぱり一番考えたのは子どもたちをどうするかということでね。一番それが悩んだんですが、私の考えとしては、学校の生徒を集めて郡山でとかいろいろ議論したんですが、私の考えとしては子どもをばらばらにさせたくないと。それから、そのためにはどうすっかということでいろいろ悩んで、最初は先生方からも抵抗あったんです。子どもたちそれぞれの避難先の学校で授業をやらせてはどうかということだったんですが、私の考えとしては子どもを一ヵ所に集めたいと。そうすると先生もばらばらになる必要ないし、それでいきたいということで最終的には先生方もそれに協力しようということになったんです。それではどうするかと。郡山の教育長のとこに行っていろいろ話をして、最初は廃校した学校ないかとかいろいろやったんですが、空き教室はあるということで、それではその空き教室をお借りしてそこに子どもたちをバスで輸送すっからということで。小学校と中学校は別々の空き教室をお借りして始めたということなんですよ。

－川内は早くまとまってスタートしたんですね。
石井：そう。

－区域外就学って形ですが、川内はお借りした小学校の名前が…
石井：河内（こうず）小学校…ちょうど河内（かわうち）って書く。偶然にもそういう学校やった。そこは、川内の子どもより人数が少なかったんですよ。なかなか郡山といえども、小規模校だった。ずっと郊外だったからね。だから、一緒にする授業もあったし、結果的には向こうもよかったんでねえの。幸い郡山の教育長が川内に住んでたことあるんですよ。奥さまが川内の学校の先生をやってて、ほして、教育長

が都路だか何かの学校にいたんさ、川内に住んでて、川内のことは何より知ってるんですよ。それで、じゃあ、川内のためになるっていうことで教室を探してくれたり何かしてね。

４．前例がない帰還後の学校再開

－川内村で学校を再開すると決めた時期っていうのは、いつまででしたか。

石井：河内小学校をお借りしていたのは１年ですよ。あとは川内に帰村しましたから。で、帰村するときも父兄の方々も集めて、川内に帰るというと、やっぱ抵抗あったんですよ。だが、村長と話し合って、村長も、いや、じゃ、もう 1 年、学校は河内に置くかということになったんですが、いや、復興すんのには、学校機能も行政機能も川内で始めたほうが復興になるということで、じゃあ、小学校も中学校も川内に戻ろうと、最終判断しまして、そして戻ってきたんですよ。

－役場機能が戻ったタイミングで 2012 年 4 月に学校も一緒に再開したということですね。

石井：そう。震災から 1 年後。帰村も含めて、双葉郡で初めての学校再開で帰ってきたのは川内が初めてですから。

－前例のない学校再開で一番責任が重かったと思われますが、悩まれた部分はありましたか。

石井：いや、やはり働く場所の問題とか何かって、親がなかなか川内に戻んないということだったんですが、いや、父兄の方々にも、川内に学校再開することによって復興が進むんだからという説得をしまして、人数が少なくても川内に機能は戻すということで最終判断したんですがね。

－双葉郡の中ではまだ先に帰ってる人たちがいない状態での学校再開でほかの背中を見れない状態ですもんね。

石井：やっぱり一番は、子どもたちの教育のために、川内にいかに子どもが帰ってもらうかというのが一番の課題ですから、それについては校長も先生方も理解を示してくれて、いや、子どもは最初は少なくても、必ずだんだん増えてくると。だから、川内で教育をやろうと。環境も川内の教育環境は素晴らしいものがあるから、そこで先生方も教育したいということで、最初は少なかったんですが、始めた結果、だんだん子どもたちも増えてきたということですから、結果的にはよかったんではないかなと思いますね。

－その時期に印象的だったエピソードとかありましたか。

石井：うん、苦しいのはやっぱり父兄からの嫌がらせっていうか、それは結構ありましたよ。なんでいま戻らないかんねだとか、放射能はどうなんだとか、現実に川内村は放射能は少なかったんですよ。ただ 20 キロ、30 キロっていうて決められたから避難っていう形になったんですが、現実的にはそんなに影響はなかったんですね、放射能としては。

－知らないことへの恐怖っていうのは科学的根拠を言っても安心は得られないですよね。

石井：やっぱし一番あったのは、安全、安心っていうのが一番の大きな課題だったと思うんですがね。そ

して、川内からは主に郡山に避難したんですが、北海道から沖縄まで避難した人がいますからね。それは、あまり長く置くと、そちらに生活がなじんじまうんですよ。そうなるとますます川内には戻ってこないということが、村長の判断としても、早く川内に戻って復興したいという村長の考えもありましたからね。

ー全国に散って避難を継続するご家庭、子どもたちへの対応はありましたか。
石井：現実的には、やはり最初からそちらの学校につながってる、転校みたいな形になってる子どもたちもかなりいましたからね、その人たちとも連絡を取り合いながら、学校と、子どもたちの生活はどうなっているかとか、いろいろ確認しながらやってきましたから。で、大変この転校先の学校も快く子どもたちを預かってくれたし、そのへんは安心できましたがね。ほして子どもですから、すぐ友達っていうか、なじんじゃうんですよね。

ーそうですよね。なじみにくいのは大人ですからね。
石井：子どもは本当に 1 週間か 10 日いれば……ええ。その間には、地域っていうか、子どもたち、なじんで遊びますから、そのへんは定期的に各学校に連絡を取ってやってみると、みんな、そういう話を聞くことは安心して、こちらもね。

ー子どもたちの帰還が復興の第一歩とおっしゃられていたと思うのですが、川内村の復興にとって子どもたちはどんな存在ですか。
石井：やっぱり子どもは宝ですからね。これは将来、川内を背負っていく人たちですから、それは大事に、川内も教育はやります。

ー川内の子どもたちにはどんな大人になってほしいと？
石井：川内に全員残るっていうのは、これ、当然不可能でしょうが、川内のこういう素晴らしい村をいかに引き継いでいくかっていうことを思ってる子どもたちになってくれればいいなと思うの。

ー教育長退任後から今まではどのように過ごされていましたか。
石井：退任してからは悠々自適っていうか、いろいろな趣味っていうか、今、絵を描いたり……郡山に橋本広喜っていう有名な画家の先生がいるんですが、そこに月 2 回行って習ったり…それ、俺描いた絵だ。（龍の絵）

ーすごい。これ、何で描いてるんですか。
石井：うん？墨彩画っつって。墨で、筆で描いて、そのあとに色染めんだよ。来年辰年でしょ？あとは、きょうもそうなんだ、月、水、金ってプールに行ってるんですわ。

ーもりたろうプールですか。
石井：そうそうそう。それ、今も行ってきたんですが、そういう楽しみをやったり、趣味を生かして楽しい生活を送ってるっていうこと。

－遺族代表を引き受けた経緯は？
石井：おふくろが亡くなったもんですから、政府主催の震災の追悼式があるんですよ。それ、何年前だったかな。東京であったんですが、そこに福島県代表で、追悼のあいさつをやってもらいたいっていうことで、別に最初やる考えはなかったんですが、村のほうからこの追悼式に出席してもらいたいという話があったんですよ。出席ぐらいならいいかなと思ってやったら、今度、福島県のほうから県代表であいさつしてもらいたいっていうあれだと？それで引き受けて、やってきたんですが。
緊張したよ。だから、総理大臣から、あんときは、秋篠宮さまかな、来てたの。うん。
ああいう経験したのもおふくろのお陰だなと思ってよ。そのあと、今度、福島県の、コロナのときかな、も行ってやってきたんですよ。あのときは誰もいなくて、知事とか、何人かいるぐらいのとこでやってきたんですが。

－役場職員時代に草野心平さんとの関わりはあったんですか。
石井：心平先生にはずいぶんかわいがってもらったよ。まだ若かった頃だから、天山文庫できて間もなくの頃ですから、日曜日あたりになると、朝、電話よこすんだよ、心平先生が。きょう、庭木の剪定すっから手伝ってくれなんて、そうすると、行って、あと、近くの、やっぱり役場職員の人も呼ばれて、行って、やって。そして、終わっと、酒飲み、朝から心平先生がやるんですよ。すると、私は酒、駄目なんですよ。それで心平先生が、俺の酒を先、飲んじゃうんですよ。そうすると、ほれで、秘書の方が一緒に来るわけだ。で、その人に、「石井君の酒ないよ」なんつって、まだつがせるわけだ。そして、それをまた自分で飲んじゃうんですよ。すごい豪快な人だったよ。

－草野心平さんと懇意にされてったっていうのは、何か最初きっかけがあったんですか。目を付けられたきっかけが。
石井：どういうあれだったんだっぺね？ずいぶん、ほして、子どもが小学生の頃かな、心平先生、東京行って、またこちらに来るようなときは子どものＴシャツなんて買ってきてくれたりね。

－教育長を辞められたあとも、天山祭りの実行委員とかやられてました。
石井：実行委員長、何年ぐらいやったっぺ？実行委員長もやりました。

－現在何か取り組まれている活動はありますか。
石井：どうやっぺな？俺は、退職してからは何も触んないようにしてんですよ、公職のあれは。だから、いろいろ言われるんですが、何々やってもらいたいとか何か、全部断ってんですよ。われわれも年齢的に高齢だし、おらが出しゃばってやると、若い人らが、若い人らが育たないっていうか、だから、できるだけやんないっていうことで、若い人にやってもらいたいっていうことで、ほとんど公の仕事は就かないんですよ。いろいろ話はありますよ。ありますが……

－あえて若い人にやってもらおうっていう……
石井：ええ。やっぱりこういう田舎は老害なんですよ。議員でもそうだし、もう少し若い人らが立ち上が

ってもらえばいいなと思うんですけどね。

ー震災前後で、今も含めて、村の雰囲気とか、村民の方々の意識とか、石井さんから見て変化とかってありましたか。
石井：今になれば、震災当時は、この襲ってくるときはいろいろありましたが、今になればみんな、自立っていうか、元の生活以上のあれはやってんでねえの？いろんな作物を、今はブドウとか、何かを取り入れてやったり、本当にみんな、本気になってやってるよ。だから、農家の人らも、かなり前のレベルとは違うね、震災前のあれ。震災前は本当に米とか、畜産ぐらいしかなかったからね、新しい作物っていうのは。今は本当にいろいろな作物を取り入れて、それを出荷して生計の足しにしてるとか、だいぶんそのへんは変わってきてますね。

４．有事の教育と教訓の継承

ー有事のときの教育っていうのはどうあるべきか震災原発事故から、何か教訓はありますか。
石井：教訓？やはり子どもの恐怖感というか、そういうあれを取り除くことと、あと、子どもたちを今後、例えば、こういう震災があったとしたら、今後はどうすべきかっていうことは、やはり今までの実践した活動状況等を踏まえながら、やはり対応すると。そのためには、やはり今までの結果を生かすっていうことでしょうね。場所が変わっても、やはり本質としては、子どもたちはばらばらにしないで一緒に教育したいと。

ー国からの避難要請でしたが自治体それぞれに判断を任せたという苦しさがあったと思うんですけど…
石井：どういう判断すっかだよね。それは最初から私の考えだったからね。ばらばらにしないという。そうなると、子どもたちがばらばらになっちゃうということは、先生も当然ばらばらになっちゃうわけですから。その当時は、いろいろな教育長の考えがあると思いますよ。だが、私としては、そういう考えで貫いてきたと。それについては、やはり村長も理解を示してくれたし、私の考えとしては、それを実践したということですから。

ー普通に授業してる状態で、震災に備えてやっておくべきことみたいなことはありますか。
石井：いや、それは学校でおそらく教育していると思いますよ。震災の場合の対応とか、何かについてはね。それについてはあとは、教育委員会のほうでそのためのバックアップは当然するということでしょうからね。主はやっぱり学校自体のあれを、教育を学校でやってもらうと。そのための支援は教育委員会でどんどんやるという形になると思いますがね。

ー震災を知らない世代の子どもたちには、この川内の震災の経験をどういうふうに思ってほしいですか。
石井：このへんが難しいとこだよね。この震災の実態を継承していくのも重要なことだと思うんですが、あまり恐怖感を与えてもまた困るでしょ？経験を知らせることはいいこととは思うんですがそのへんの判断は難しいと思うね。

ー川内村の歴史の中で震災は外せないところにありますよね。
石井：確かにそれはあると思いますがね。ただ、今の子どもらに「あの時こうだったよ」って言ったっておそらく聞き流しちゃうぐらいの話でしょ？継承っていうのは難しいと思うけどね。おそらくあと20年、30年たったら本当に忘れちゃうよ。皆さんだって、戦争のことなんて、全然分かんないでしょ？われわれも分かんないしね。

ーそうですね、そして第二次世界大戦もどういうふうに継承していくかっていう問題は78年たってもまだ残ってますしね。2011年からちゃんと残せていけるかが難しいですね。12年ですらこういう状態ですもんね。
石井：特に原発事故は、このへんの人はかなり問題にしてるけど、ほかの地域は全然そんなの問題にしないでしょ？
ーそうですね。自分から学んだりしないと考える機会っていうのがないですよね。課題ですね…われわれも、大学でも考えなきゃいけないです。

ー石井さんにとっての復興とは何ですか。
石井：建物造ったからどうのこうのでなくて、いかに村民の方々に暮らしやすい、暮らしよい村を築いていくかでしょうね。まだまだ不便な点はありますから。特に川内一人暮らしの高齢者も多いんですよ。その人たちを今後どうしていくかだね。子どもが面倒見るのが一番いいんですが（川内には）子どもがいないですから。そして、山奥に一人で住んでる高齢者がかなりいるんですよ。だから、村でその一人暮らしの人たちを住むような建物を造って子どもたちも安心して親を川内村に置けるというような政策も必要ではないかと思うね。

ー本日は長時間ありがとうございました。
石井：いや、こんなことならいつでもいいよ。また来て。

【学生の感想】

私たちの質問に丁寧に答えてくださる、石井さんの人柄の滲み出るインタビューとなりました。川内小中学園の子どもたちの遊ぶ声が聞こえる中、ご自身も被災者として耐え難い経験をされながら、震災時・帰村時の教育長として子どもたちにみんなでまとまって教育を受けてほしいという思いを貫かれた石井さんのお話を伺うことができとても良い経験となりました。

人間発達文化学類１年　八島春日

石井さんの素晴らしい人柄に触れることができた時間でした。班のメンバーはこれまでインタビューをするという経験をしたことがない人がほとんどで、未熟な部分もあったと思いますが、そんな部分も受け止めてインタビューを進めていくことができました。貴重な経験をすることができました。

食農学類１年　石倉未晴

全村避難からいち早く帰還し教育を再開するという前例のない決断をされた石井さんのご経験と当時そして今の考えをお聞きすることができたことはとても貴重な経験でした。今回のインタビューを通して、復興という面だけでなく地域や文化の維持・活性には、子どもと地域の関わり方が一つのポイントなのかもしれないと思うようになりました。また、震災から 10 年以上たった今だからこそ、当時のことを伝えていく、災害伝承という面ではまだまだ課題があるのではないかと感じました。

行政政策学類 1 年　千葉羽奏

インタビューを通して、改めて災害を通しての故郷の伝承、残し方の重要性を学びました。また誰に向けてのアーカイブであるか、何を伝えていくべきであるか等を考えることで、細かな震災の背景・個々の思いなど新たな視点から見えてくる部分もあり、講義とは違った新しい経験を得ることができました。

食農学類 1 年　太田葵